

## 2. 起倒流における名辞「柔道」の出現とその背景： 直信流との関係に着目して

茨城大学 中嶋 哲也

キーワード：直心流、講道館柔道、系図、道統

## 2. The Term “Judo” in Kito-ryu: Historical Background and Relationship with Jikishin-ryu

Tetsuya NAKAJIMA (Ibaraki University)

Key words : Jikishin-ryu; Kodokan Judo; genealogy; direct descent

### Abstract

When studying the history of jujutsu and judo, an important point of research involves clarifying the changes made to the term “judo” and its meaning. Studies have pointed out the influence of Jikishin-ryu (a predecessor of Kito-ryu) on the historical background of this term in Kito-ryu, which used the term “judo” during the Edo era after 1724. It is well known that Kodokan Judo was based on Kito-ryu jujutsu and Tenjinshinyo-ryu jujutsu; thus, it is necessary to clarify the origin of “judo” in the context of Kito-ryu to examine whether Kodokan inherits the idea of Kito-ryu Judo. However, since there exists insufficient evidence on whether Jikishin-ryu influenced Kito-ryu, this study’s purpose is to clarify the historical background of the term “judo” in Kito-ryu, while considering its relationship with Jikishin-ryu.

Our results show that the first appearance of the term “judo” was in the work Kito-ryu Yoroi Kumiuchi Ryaku Keifu (The Genealogy of Kito-ryu Grappling with Techniques in Armor), written by Yuken Takino, who popularized Kito-ryu during the Edo period. This treatise was handed down from Takino to Douemon Nozu in 1745. Nozu was a retainer of the Matsue clan in the birthplace of Jikishin-ryu, and during the Edo period he was on duty at their residence, which was maintained by a daimyo (Japanese feudal lord). Nozu met Takino during this time and probably told him that the term “judo” should be used in Jikishin-ryu. Because of this interaction, Takino is thought to have used “judo” in his treatises.

## 1. 研究の目的

本研究は起倒流でどのような経緯で名辞「柔道」が使われるようになったのかを考察することを目的としている。柔術・柔道史の課題の1つに「名辞と語義」<sup>1)</sup>の変遷を明らかにする作業がある。起倒流で柔道という名辞が使用されていたことは講道館柔道創始者の嘉納治五郎が師匠の飯久保恒年より発給された免状に「起倒柔道」とあることから明らかであり<sup>2)</sup>、講道館柔道が思想的に起倒流の「柔道」を継承しているかどうかを検討するためにも、起倒流における「柔道」の由来について明らかにしておく必要があるだろう。

### 1. 先行研究の検討

柔術史における名辞「柔道」の形成過程についてはいくつかの先行研究が提出されている。藤堂・村田は鳥根県の旧松江藩に伝承された直信流を調査し、享保9（1924）年にそれまで名乗っていた直心流柔術を改め、直信流柔道と名乗ったことを明らかにしている<sup>3)</sup>。菊本は、直信流の影響とともに鈴木清兵衛邦教（以下、「鈴木邦教」と略）が家伝「神武の道」の教えを取り入れて起倒流柔道を名乗ったとされる<sup>4)</sup>。しかし菊本の見解は資料に基づいて明らかにされておらず、直信流の影響についても具体的な資料を提示せず、検討の余地が残されている。

これに対して原・魚住は起倒流で「柔道」という名辞が用いられた最も早い例として延享2（1745）年に滝野専右衛門貞高遊軒（以下、「滝野」と略）が作成した『起倒流鑑組討畧系譜』（以下、『畧系譜』と略す）を挙げている<sup>5)</sup>。本研究も原・魚住が提示する『畧系譜』が起倒流で「柔道」を用いた最も古い文献とみている。しかし、原・魚住は起倒流で「柔道」が呼称されるようになったのは直信流からの影響であると指摘するものの、資料に基づいた具体的な影響関係を論じていない。つまり、残された課題は起倒流で「柔道」が用いられる経緯に直信流がどう関与しているのかを資料によって跡付けることである。

### 2. 各章の課題

本研究では起倒流の流祖及び起源をめぐる学説について再検討したいと思う。この作業は起倒流と直信流とが関係しているとすればそれはどういった関係なのかを検討する上で必要になってくる。2010年代以降は直信流（直心流）の研究が進んでおり<sup>6)</sup>、その成果を踏まえることで従来と異なる起倒流と直信流（直心流）の関係史が描けるのではないかと考えられる。

以下、各章の課題である。まず、第II章では起倒流の成立過程について再検討する。起倒流の研究では流祖の確定作業が常に問題とされる。現在のところ茨木又左衛門俊房専斎（以下、「茨木」と略）と寺田勘右衛門満英（幼名、正重。以下、「満英」と略）とが流祖として有力である。現在はこの2人の内、茨木流祖説が有力である。それは柳生十兵衛の『月の抄』に寛永14（1637）年に茨木が沢庵から起倒流の名を授かったと述べられているためである<sup>7)</sup>。また、『月の抄』には茨木が発行した『起倒流乱目録』が載せられているので、起倒流乱の成立時期が寛永14（1637）年であることには本研究も異論はない。ただし、問題はその後を継いだといわれる吉村兵助扶寿（以下、「吉村」と略）及び吉村の弟子である堀田佐五右衛門頼庸（以下、「堀田」と略）の伝書に茨木の名が出てこないことである。代わりにこの時期に作成された起倒流の伝書では満英が起倒流の創始者ということになっており、以後も満英流祖説は起倒流の伝書類において主張され続けることになる。

一方、直信流でも満英は直信流の流祖とされており、このことが現代の研究者をして起倒流

と直信流の関係を指摘する根拠になっているとともに、満英が起倒流の創始者ではないことの根拠ともされてきた。本研究は先行研究におけるこうした満英の位置づけ方にこそ、起倒流と直信流（直心流）の関係に踏み込めない原因があるとみている。つまり茨木流祖説を採る研究者は満英が直信流の創始者であるため、起倒流を創始したとは考えられないと主張するのである<sup>8)</sup>。これに対して拙稿<sup>9)</sup>では満英は直信流及びその前身にある直心流を創始していないことを指摘した。そのため、第Ⅱ章では拙稿の知見を踏まえて起倒流の成立過程を起倒流乱及び直心流の伝書も踏まえて再検討したい。

第Ⅲ章では、起倒流で「柔道」が用いられる経緯を直信流の門人の動向に焦点を当てて、明らかにする。その際、直信流の方では起倒流との交流をどのように受け止めたのかも併せて考察する。

なお、本研究で使用される資料は鈴鹿家文書の謄写本や真田宝物館の起倒流関係資料<sup>10)</sup>であり、その他翻刻された文献が中心である。また、本研究では後代に残すために作成された系図や伝書を用いるが、これらは作者の主観が色濃く反映されているため、事実関係を解明するには注意が必要である。歴史学者の佐々木哲はこうした系図等の二次資料の扱いについては「多くの資料と付き合わせ、多くの資料との間で無矛盾であるという〈間資料性〉を確立する必要がある<sup>11)</sup>」と述べる。本研究では系図や伝書のみならず様々な資料を突き合わせ、蓋然性の高い知見の提示を目指す。資料の引用にあたっては適宜、漢文は書き下し、句読点も加えた。既に翻刻されている資料についてはそのまま引用した。

## Ⅱ. 起倒流の成立過程における起倒流乱及び直信流（直心流）の関係

起倒流の成立過程を述べる前にまず先行研究の問題点を先に述べておきたい。渡辺一郎は起倒流の伝書を翻刻するなかで「寺田系（松江）の起倒流および直信流傳書は、いずれも福野直傳の寺田勘右衛門正重（満英）を起倒柔術の始祖として、茨木又左衛門専齋の名をことさらに除去している<sup>12)</sup>」と指摘している。渡辺の指摘は時期的に老松信一の研究<sup>13)</sup>を背景に述べられたものと考えられるのであるが、本研究では茨木が起倒流及び直信流の伝書に出てこないのは、茨木と満英とが直接出会っていないからだと考えている。

老松以降、『月の抄』とともに寛政3（1792）年に林爾<sup>じびん</sup>攸によって作成された『起倒流秘書註解<sup>14)</sup>』（以下、『註解』と略）や嘉永元（1848）年に写本された『起倒流系図』（以下、『系図』と略）など江戸後期の資料によって、茨木流祖説や基本伝書の成立は根拠づけられてきた。しかし、先行研究ではこれら資料に対する資料批判はほとんどみられない。したがって、まずは『註解』及び『系図』の内容を検討することから始めたい。

### 1. 茨木専齋は寺田満英に出会っているのか？

まず、『註解』から起倒流の成立に関わる箇所を引用したい。

家光公之御時、劍術ニハ柳生但馬守、柔術ニ於テハ茨木専齋、共ニ天下ノ一人也ト云ヘリ（中略）兩人東海寺ノ澤庵老師ニ參禪シテ、此道理ヲ明メン叟ヲ求ム、故ニ澤庵、諸佛不動智ト云書ヲ作テ柳生ニ与エ、亦本體・性鏡ノ二卷ヲ書シテ専齋ニ授テ、委曲ニ其旨ヲ教化ス（中略）其後当流吉村兵助扶寿ガ時ニ至テ、彼、本體卷・性鏡卷ハ甚深微妙ノ心理ニシテ、甚向上成物故ニ、文字言句ノ上ニテハ其意ヲ解ス叟不<sub>レ</sub>能、ヨクニ心理ニ徹セザレバ不<sub>レ</sub>知

物故、扶寿新たに天・地・人三卷ノ書ヲ著述シテ、更ニ己ガ發明シタル趣ヲ以テ門弟子ニ教来レリ<sup>15)</sup>

ここでは茨木が東海寺で沢庵に会い、『本體』、『性鏡』といった伝書を授かったこと、その後、吉村はこの2巻は難解なので、新たに『天卷』、『地卷』、『人卷』を作成し、更に自身の工夫を加えて伝承したことが記されている。茨木流祖説を支持する先行研究では茨木と沢庵の出会いを示すこの記述が『月の抄』の内容と合致するので、参照されてきた。

ただし、『月の抄』では沢庵は茨木に起倒流の名称を授けたと記されるだけで、『本體』、『性鏡』を授けたとは記されていない。また、沢庵から茨木に発給された『本體』、『性鏡』が現在発見されていないため、『注解』が述べる起倒流の成立過程が正しいかどうかは判断することができない。

さらにいえば、茨木自筆の『本體』、『性鏡』も見つかっていない。現在、茨木が作成したとみられる伝書は『月の抄』に収められた『起倒流乱目録』のほか、筑波大学図書館に所蔵される寛永16(1639)年の『起倒流乱得心之目録』<sup>16)</sup>、佐賀県立図書館に所蔵される寛永19(1642)年の『起倒流乱目録序・起倒流乱授業目録』<sup>17)</sup>及び『起倒流乱組討目録』、鈴鹿家文書にある鍋島藩の『起倒流乱心持目録』、『起倒流乱目録』、『起倒流乱得心之目録』、『天地之部』、さらに承応4(1655)年2月に作成された『行用集』などが確認されている。

このなかで鈴鹿家文書の『天地之部』は大正6(1917)年に古賀太吉という人物が書写したもののだが、元は山田有安宗俊という人物が天和2(1680)年に茨木の子息、茨木三安昌軒(以下、「昌軒」と略)から借り写したものである。同書末尾には「右の一冊は御兵法の御不審に従い、上の意を沢庵和尚書上げられ候、茨木専齋これを写す」<sup>18)</sup>と記されている。茨木は沢庵の『天地之部』を書き写したのである。また、『天地之部』には鍋島元敦による続きがあり、「此一巻ヲ但馬守殿ヨリ与エラレ秘シテ嫡流ニ伝来ス」<sup>19)</sup>とある。つまり、同書は柳生宗矩から茨木へと与えられ嫡流(昌軒)に伝授されたとも伝えられている。いずれにせよ、沢庵から茨木に何か伝授されているとすれば、それは『天地之部』であって『本體』『性鏡』ではないのである。

『天地之部』は沢庵の『理気差別論』と同一文章であると渡辺は指摘する<sup>20)</sup>。『天地之部』には『性鏡』にある陰陽、忘機などの用語が出てくるが、本体はみえない。また同書の陰陽、忘機が『性鏡』のそれと同じ意味かどうかは判断が難しい。『性鏡』では「陰陽中」「忘機」と用語だけ示され、何の説明も付されていないからである。

では、その他の起倒流乱の伝書に『本體』『性鏡』の用語はでてくるのだろうか。『起倒流乱心持目録』、『起倒流乱得心之目録』、及び『行用集』は勝負の心持や心法について詳述された伝書であり、内容的にはほぼ同じ形式をとっている。『本體』、『性鏡』の内容が反映されているとすれば、これらの伝書である。しかしこれらの伝書でも『本體』における本体や『性鏡』にある陰陽、中、太極、忘機といった用語は用いられていない。例えば『行用集』で起倒流乱の由来について説明した以下の箇所では、新陰流で使用される「本心」が登場する。

起倒流と名付て一流をたつる叟、此所を觀じてより、組打当流をひろむるなり。此所を知ぬれば、起而利有に不<sub>レ</sub>有、倒て負<sub>ル</sub>にあらず。立而も居ても、寝而も起ても、奇妙成正理有べし。乱と言は、此所を能悟て、我本心を納て、人の乱るゝを勝により、起倒流乱と名付る也。<sup>21)</sup>

ここで、もし『註解』の記述が正しいのであれば、茨木自筆の伝書のなかで『本體』や『性鏡』の用語が使われないのは違和感がある。そのため、本研究では『本體』、『性鏡』に関する『註解』の主張は蓋然性が低いと考える。

次に、『系図』について検討しよう。『系図』は徳川宗敬より東京国立博物館に寄贈されたものである。嘉永元(1848)年に「荒井先生」という人物から借り写した資料であり、末尾に「牛込若宮青木文庫」とあるので現在の新宿区付近、つまり江戸で「青木文庫」を営んでいた人物が写本したものと考えられる<sup>22)</sup>。『系図』は1つの系図が記されたものではなく、「起倒流系図」、「起倒流系図序」、「柔道大系図」、「正傳起倒柔道傳流系脈柔道開基」、「起倒流法事」、「和法古言」、「起倒流柔術修業の序」という7つの資料から成る。原・魚住は茨木と満英の関係について同系図から直接引用はしておらず要約に留めている。ここでは原・魚住が根拠としたであろう「柔道大系図」の「寺田勘右衛門正重」の項を引用したい。

寺田平左衛門次男、八左衛門弟、親兄の教を受け、良移心當流を学び夫方茨城專齋<sup>ママ</sup>に随ひ形を修行し鏡心防によつて小具足を極め、性理を学ふ事好て心術を得る、体性心三巻を作り、初ハ良移流に七体トト日鏡水鑑のミにて余傳なし、其七体に陽の形をまふけて十四として書を本体のまき性巻と改、離形扱気といふ事をもつて無拍子を發明す(中略)起倒流鏡組打といへり、起倒の元祖也<sup>23)</sup>

ここでの要点は満英が茨木に学んでいたとしているところだろう。ただし、引用箇所では起倒流の發明に際して満英が土台にしているのは福野七郎右衛門正勝(以下、「福野」と略)の良移心當流である。すなわち、父兄から良移心當流を学んだ満英は当初編んだ「体性心三巻」の伝書を『本體』、『性巻』に再編し、良移心當流の形を發展させて十四の形を設け、さらに無拍子を發明し、起倒流鏡組打を創ったということである。茨木流祖説の支持者はこの説明をどう解釈するのか。

果たして、満英は茨木から起倒流乱を学んでいたのだろうか。現在、茨木が満英に発給した伝書の写本すら発見されていないことから、彼らが直接出会っていたとは言い切れない。ただし、現在入手できる資料から間接的に満英が起倒流乱について知り得た可能性は指摘できる。次に満英が存命中に著した直心流の伝書を検討しよう。

## 2. 直心流における満英、茨木、福野の位置づけ

さて、『地巻』に代表されるように、起倒流において満英を創始者とする伝書及び系図は多い。一方で、享保9(1724)年以降の直信流の伝書や系図でも満英は創始者と位置づけられている。では、享保9(1724)年以前の直心流の時代ではどうだったか。拙稿にしたがって検討しよう。まず、直心流時代に満英が発行した伝書は『直心流柔序』、『無明書』、『赦状』の3つである。このうち、直心流の系譜に関する記述は『直心流柔序』に記されている。拙稿では『直心流柔序』は寛文4(1664)年頃に満英の異母弟で父・寺田平左衛門定安(以下、「定安」と略す)の家督を相続した寺田平左衛門定次(以下、「定次」と略)が書写したと考えられるものと、寛文10(1670)年に宛所不明だが満英の署名と花押が入ったものを使用した。寛文4年版には「以拍子為主講習之品少」という一文が抜けているが、それ以外は寛文10年版と同様である。まずは寛文4年版に沿って直心流の成立背景をみてみたい。

家君の定安始めて此の得る術を福野氏某に語る。福野氏感じて此の術の傳を求む。定安福野氏と友なること善し。此の時福野氏、牢浪して家貧しく為し、此の術を售り飢渴を救はしめんために之を傳えて吝しらず。既にして又相ともに講習論訂し或は増し、或は減じ、新嘗和と號す。然れども、福野氏用いる所は専ら柔弱を以てして勝つことを主と為す。定安の得る所と小しく同じくして、大いに異なる。其の後、定安の弟頼重、定安に親炙し此の術を講習して足らざるを補い、備わらざるを修め、別に直心柔と號する。予幼にして、父伯に従う。昕夕覃研して略其の心に通ず<sup>24)</sup>

まず、『直心流柔序』では直心流(「直心柔」)を称したのは満英の叔父寺田八左衛門頼重(以下、「頼重」と略)であり、満英が名乗ったのではないことが挙げられる<sup>25)</sup>。これは寺田家内で伝わった伝書であることから、親族関係の説明に虚偽があるとは考えられない。もちろん、享保9(1724)年以降、直信流に名前が変わった後には満英が流祖のように扱われるが、それは直信流において満英の教えこそが本質的だと考えられたためだと考えられる。享保6(1721)年に井上重永が著した『直心流柔術序』には「右の序文並びに柔術は先師満英心得の妙術ほぼ其要を述べるなり」<sup>26)</sup>とあり、寺田定次以降の伝承において満英の教えが同流において重要なものと認識されるのである。また、享保14(1729)年に直信流の井上治部大夫正順(以下、「正順」と略)の弟子で堀江という人物が書いた『中央書』の序文に「柔道の至理が惑乱して、道德日を追って衰う。吾が師、これを歎き以て柔之道改補する也」<sup>27)</sup>とあり、先行研究ではこの記述に基づいて、直心流から直信流へと改めたのは正順だとしている<sup>28)</sup>。

次に満英の父・定安は、貞心流和術を創始したとされる人物であり、冒頭に出てくる「此の術」とは貞心流のことと考えられる。定安とともに「新當和」を創った「福野氏」とは良移心当流の福野のことと考えられる。『月の抄』に載せられた良移心当流の伝書の奥書には元和8(1622)年とあるが、その時まで定安は福野に貞心流を伝承したものと考えられる<sup>29)</sup>。久保山によれば、定安は馬廻組として松江藩主の京極忠高及び京極氏に代わって入封した松平直政に250石で仕えたが、京極氏は慶長14(1609)年から寛永11(1634)年の間、若狭の小浜藩主であった<sup>30)</sup>。定安は小浜藩士時代に福野と出会い、福野の良移心当流創始に関与したものと考えられる。

福野と定安の繋がりには直心流と起倒流乱の関係を考えるとき重要である。つまり、元和年間には福野と寺田家は関係を持っていたのであり、このルートから寺田家に新陰流に関する情報が入ってきていたものと考えられる。つまり、『直心流柔序』には茨木の名前はみえないが、福野が寺田家に起倒流乱の情報を伝えている可能性はあるのである。

もう一つ考えられるのは頼重のルートである。慶安2(1649)年8月に茨木の子息である昌軒から「正親町宰相中将」へと進上された『起倒流乱目録』がある<sup>31)</sup>。宰相中将は公家の官職で近衛中将を兼ねた参議のことであり、正親町実豊が正保元(1644)年に右近衛中将に就いていることから『起倒流乱目録』は実豊に進上されたものと考えられる<sup>32)</sup>。一方、頼重は元和6(1620)年から承応4(1654)年12月まで京都所司代を務めた板倉周防守重宗に仕えていた<sup>33)</sup>。そのため、頼重は昌軒が京都で起倒流乱を伝承している時期に同じく京都にいたとみられ、地理的には互いに交流することが比較的容易だったのである。例えば慶安2(1649)年には直心流伝書として『諸佛不動智』が遺されているが、これなども頼重が京都で昌軒から『不動智神妙録』を借り写した可能性が窺われるのである<sup>34)</sup>。『直心流柔序』で満英は頼重から「直心柔」

を学んだとあることから、満英も松江藩に仕える前に京都に滞在していた可能性が考えられる。

しかし、満英が京都に滞在していたとしても、そこにいたのは昌軒であり、茨木ではない。また茨木との師弟関係があったとして、それを隠す理由が満英にはない。むしろ『直心流柔序』の記述をみれば満英は茨木よりも福野から大きな影響を受けているといえる。そのため、茨木の満英への影響は間接的なものに留まるのではないか。

また、満英が作成した起倒流伝書は見つかっておらず彼の伝書で発見されているのは直心流のもののみである。つまり、現在の資料の発掘状況からして、茨木及び満英の流祖説はどちらも可能性の段階に留まるのである。

### 3. 起倒流における満英、茨木、福野の位置づけ

では、起倒流と起倒流乱及び直心流の関係は吉村以降どう考えられたのか。現在確認できる最も古い起倒流伝書で乱を冠しないものは貞享2（1685）年に吉村が平野半平（以下、「平野」と略）のために作成した『地巻』（図1-3）である。これは原本の双鉤であり、古態を遺している。この『地巻』は寛延2（1749）年に堀田の弟子である寺田市右衛門正浄（以下、「正浄」と略）の手に渡り、宝暦13（1763）年には正浄から朝日鬼一という弟子の手に渡っている。

平野は赤穂藩士であり、元禄13（1700）年には馬廻200石であったが、元禄15（1702）年8月、吉良邸討ち入りの前に離脱を表明し、京都に身を隠したという<sup>35)</sup>。図3の朱書きの箇所をみれば、平野は吉村から『地巻』を受けた後、堀田氏の養子になり、「堀田佐五右衛門」を名乗ったとされている。つまり、平野は堀田と同一人物なのである。名前が変わったのは元禄15（1702）年以降のことと考えられる。



図1 『地巻』序（真田宝物館所蔵）。

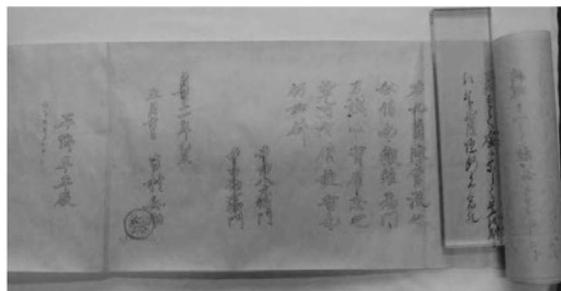


図2 『地巻』奥書（真田宝物館所蔵）。

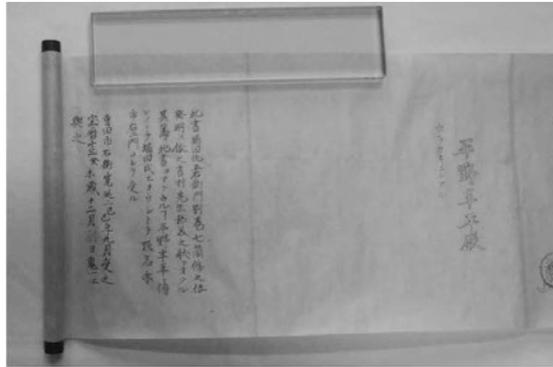


図3 『地巻』裏書（真田宝物館所蔵）。

では、この『地巻』の序文を確認しよう。

ほのかに聞く中比福野某といふ者ありて組討雌雄の術を修煉し微力にして剛強と對し全き勝利をうる事をなす。しかは当れど、其術世にあまねくつたふる者おほからざりしに、三浦某、寺田某、此両氏福野士の門弟として一貫の道をきはむ。そのご両士、ながれを分て、ひろく衆を導びく。所謂、三浦には和と云ひ、寺田は柔とおしゆ、兵法云柔能制<sup>柔</sup>剛<sup>剛</sup>と。まことにゆへ有かな。予が師寺田正重先祖の業を稟、せつさ琢磨して其淵源を極るのみにあらず、更に己が意を付て無拍子といふことを發明す。是則微妙の真利なり。號て起倒といふ。しかじか方いらい、其術益あきらかにして、門人弥すすみ其名四方にたかし。予も又彼門にあそぶ事年有、さづくるに三巻の書をもつてす、後学の徒夜半に思ひ夙に煉、終に無拍子の真利を握ることを得ば、其敵応すみやかなる事、石火のごとく、勝を得る事、素手にして強蛇を捕るにおなじからんと云爾

寛文十一年辛亥春三月上弦<sup>36)</sup>

『直心流柔序』の内容と突き合わせれば、『地巻』の序文にいう福野の門弟として「柔」を教えた「寺田某」とは「直心柔」を名乗った頼重のことと考えられる。図2には「寺田勘右衛門」の前に「寺田八左衛門」、即ち頼重の名前も記されている。頼重を道統の起点に位置づけるのも他の起倒流伝書にはない同伝書の特徴である。つまり、吉村は起倒流が頼重以来の伝承であることを主張しているのである。また満英は無拍子を發明したことを以て「起倒」と号したとされるが、『直心流柔序』では満英が「拍子を去」<sup>37)</sup>る工夫に腐心していたことが記されている。さらに、「石火」のように『不動智神妙録』を思わせる用語が用いられている点も直心流との関係が意識されていると考えられる。寛文10年版の『直心流柔序』では「不動智」<sup>38)</sup>の教えが満英によって示されているためである。

つまり、『地巻』の序文は『直心流柔序』の記述とほぼ一致するのである。無論、『地巻』で「號て起倒」と述べたのはあくまで吉村であって満英が名乗った確証はないが、満英が頼重直心の直心流とは別に起倒流を立てたとみることには無理はないだろう。また、吉村の『地巻』における道統の起点は頼重であり、吉村が直心流の延長線上に起倒流を位置づけていることが『地巻』の序文から読み取れるのである。

一方、吉村は『地巻』の序文で茨木や起倒流乱について言及していない。吉村が茨木から起倒流乱を学んでいたとして、それを記さない理由が吉村にはない。吉村が茨木を『地巻』の道統に記さなかったのは、『注解』に示されたような茨木と吉村の師弟関係がなかったからではないだろうか。

この後、『地巻』は18世紀初頭には起倒流の基本伝書として相伝体系に位置づけられる。これが起倒流で満英流祖説が広まる要因となっていると考えられる。

さて、『直心流柔序』及び『地巻』では『本體』『性鏡』に言及されていない。『性鏡』の原作者が誰かは本研究でも追い切れなかったが、『本體』については元禄11(1698)年2月に平野が赤穂藩士の間重次郎に発給した1点がある。図4がそれである。これは戦前最大の武道団体であった大日本武徳会が明治期末に発行していた『武徳会誌』に載せられたものであり、現在確認できる『本體』としては最古のものである。江戸で滝野門下の鈴木邦教に起倒流を学び、後に大坂町奉行となった水野忠通は『柔道雨中間答』で「本体ヲ授ルニ始メニ傳フ事ハ、頼庸以来タルヨシ」<sup>39)</sup>と述べている。現段階では堀田(平野)自筆の『本體』が確認できるという点で、水野の主張は茨木、満英らが『本體』を著したという説よりも蓋然性が高いだろう<sup>41)</sup>。

図4をみると、平野は「寺田勘右衛門」と「吉村兵助」を道統として仰いでいるが、頼重の名前がないことが分かる。つまり、満英を直心流から切り離して起倒流の流祖と位置づけたのは平野、つまり堀田であると考えられる。

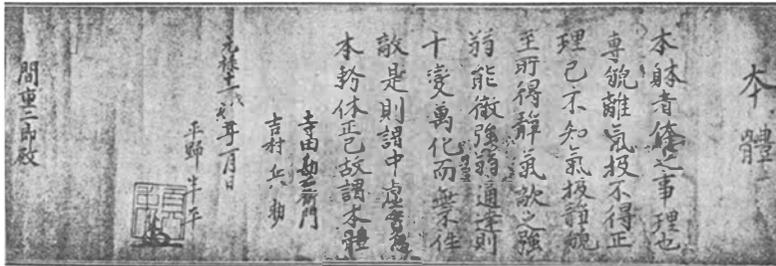


図4 平野半平が元禄11(1698)年2月に赤穂義士間重次郎に発給した『本體』。ここでは「重次郎」ではなく、「重二郎」となっている(出典:市川阿蘇次郎編、『武徳会誌』,大日本武徳会本部,12号,1910年。)

#### 4. 茨木専齋の再発見

では、起倒流では、いつ頃誰によって茨木及び起倒流乱への関心が高まったのだろうか。本研究では、それは正浄だと考える。正浄は京都の町人出身であったが、堀田について起倒流を学び、享保2(1717)年に『二勢中』(『性鏡』の別名)を授かっている<sup>40)</sup>。享保9(1724)年に堀田が死去した後も研鑽を重ね、享保14(1729)年に『登假集』を作成する。その正浄は執筆年不明だが、『富嶋氏意起倒流組討心持問書』という書を遺している。奥書には次のように記されている。

右一卷は近世、富嶋新右衛門ト云人、起倒流乱指南アリシヨシ、此人當流系圖ニ見えず、傳來知らず、此書サル官家ニ有シヲ縁ニ依テ申請ル<sup>41)</sup>

このように正浄は起倒流の門人である「富嶋新右衛門」の書を知り合いの「官家」にお願いしてみせてもらったということである。正浄が京都在住であること、また兄弟弟子の滝野も禁中の士であったことなどから「官家」は比較的近い人物だったと考えられる。正浄は富嶋のことを知らず、系図にも名前が無いと述べているが、ここから正浄は起倒流の道統や起倒流について調べていたことが分かるのである。茨木についてもその過程で再発見したのではないだろうか。ただし、堀田直伝の満英流祖説を否定できなかったのか、『登假集』にも「元祖正重は(中略)起倒の一流を發明す(中略)五卷の書を編み、十四形の取形をもって」<sup>42)</sup>と記している。また渡辺が校訂した『登假集』には茨木の名前の横に「大圓鏡知流刀術」と肩書が付されており、起倒流流とはされていない<sup>43)</sup>。さらに、鈴鹿家文書及び天理大学に所蔵されている『登假集』には茨木の名前はあるものの、肩書は記されず、起倒流流との関係も記されていない<sup>44)</sup>。このように、茨木の位置づけはまだあいまいであったが、ともあれ、こうして正浄が起倒流の歴史を探求し始めたことで、満英流祖説の立場から起倒流流、直心流の系譜が検討・整序される段階に入ったのである。

### III. 名辞「柔道」、直信流から起倒流へ

さて、前章では正浄の代に起倒流流、直心流が起倒流と系譜認識の上では接点を持つようになるところまでを確認した。本章では、では起倒流の名辞「柔道」が直信流からどう伝わったのか、両流派の相互関係を検討したい。

#### 1. 『畧系譜』の特徴

冒頭で述べたとおり、起倒流の側で「柔道」に言及した最も古い伝書は延享2(1745)年に滝野が執筆した『畧系譜』である。『畧系譜』には福野から正浄・滝野の代まで系譜が記されている。現在は鈴鹿家文書に写本が残されている。まず確認しておきたいのは、『畧系譜』の系図には茨木の名があり、「新陰兵法奥意ヲ兼得テ柔道ニ通乱起倒流ト云」<sup>45)</sup>と紹介されていることである。また、『畧系譜』の満英の説明には「父兄ノ業ヲ稟又専齋カ乱起倒ノ意ヲ教テ離形扱気ノ術神妙ニ通ス改テ起倒柔道鑑組討ト号」<sup>46)</sup>とある。ここで滝野が茨木について知っていたのは正浄の起倒流流の研究によると考えられる。ただし、正浄とは異なり、滝野は満英が茨木から直接、起倒流流の意を教わったとする言説を構築したのである。滝野の起倒流は江戸で教えられたため、参勤交代や各藩定府の士などを介して日本各地に広がった。その結果、『註解』や『系図』のような江戸後期の資料に茨木と満英の師弟関係が示されるようになったものと考えられる。こうした背景を踏まえ、延享2(1745)年以降に作成された起倒流の語りや系図に基づいてその歴史を把握することには慎重にならなければならないだろう。

さて、『畧系譜』で問題となる箇所を引用したい。『畧系譜』には起倒流の系譜のほか、作者滝野は満英と起倒流流の関係を次のように述べている。

杯起倒流鑑組討は祖寺田正重、今の遊軒貞高まで四代傳來業形表裡二十一并に本體卷、天地人卷、性卷等の書を以て吾本来の妙安柔能く剛を制するの術を教える。性の卷は天理人道の極まる所にして柔道の大本也。此の書、元祖正重家嫡へ相傳なくして卒す。其の後、吉村扶寿より彼書を送るといへども、是又口授無くして卒す。未だ後の代は知らず。諸流の者より柔道の本家へ傳へ、さの趣を遺言す。忘師頼庸、多病にして其の事成らずして卒す。予、貞高は幸いに野津氏に會して此の意を申し伸べ畢。

滝野姓古月斎遊軒

延享二乙丑年十二月

野津度右衛門 雅居<sup>47)</sup>

滝野によれば、起倒流の伝書『性鏡』が「柔道の大本」を伝えていること、そして『性鏡』は満英の嫡男には相伝されていないこと、さらに吉村が『性鏡』を伝えたが、その口伝はされずに死去したこと、諸流の門人が柔道の本家である直信流に「柔道の大本」の趣を伝えているのみであること、滝野の師堀田は多病にして直信流に『性鏡』の意を伝えられなかったことが述べられている。そのなかで滝野は野津度右衛門（以下、「野津」と略）と出会うことができたため、柔道の意を伝えることができたとしている。

要点は3つである。1つ目に「柔道」という用語が用いられていること、2つ目に滝野は『性鏡』こそが「柔道の大本」であると考えたことである。つまり、起倒流における「柔道」の意味を探るには『性鏡』を理解することが必要である。そして3つ目に滝野が野津という人物に『畧系譜』を渡していることである。本章で取り上げるのは3つ目である。野津とは一体誰なのだろうか。

## 2. 野津の経歴

『畧系譜』は鈴鹿家文書に所収されているが、出所は「第二四二号 直信流返証文之事（大阪井上家）」<sup>48)</sup>であり、直信流の文献として伝えられている。つまり、『畧系譜』は直信流側に伝わった起倒流の系図である。しかし、野津の名は直信流の伝書にみられない。

では、野津とは一体どのような人物なのか。それを探る前にまずは、滝野が『畧系譜』作成時どこに滞在したのかを確認しておこう。滝野は大阪の堀田の道場で正浄とともに起倒流を学んでいたが、享保9（1724）年に堀田が死去した後、正浄に一門を譲り、自身は延享元（1744）年から宝暦元（1751）年の間と、宝暦8（1758）から宝暦12（1762）年に死去するまでの2度、起倒流を広めるために江戸に出てきて、道場を構えたのである<sup>49)</sup>。すなわち、最初の江戸下向の期間に『畧系譜』は作成されたのである。

では野津は江戸にいたのであろうか。ここで野津の来歴を探るため、松江藩士の記録の1つである『松江藩列士録断絶帳解説』（以下、『断絶帳』と略）を検討したい。今回は島根県立図書館所蔵の翻刻されたものを使用する。松江藩士の記録は先行研究でも使用された『藩主給帳』以外にも『松江藩烈士録』（以下、『烈士録』と略）及び『新番組烈士録』があるが、『畧系譜』の野津と同姓同名の人物がみえるのは『断絶帳』のみである。また、旧松江藩士であった重村俊介が大正期に著した『旧藩事績』から松江藩の格式と職制について抽出しまとめられた『松江藩格式と職制』（以下、『格式』と略）という文献がある。これによって野津の松江藩における立場を検討したい。

さて、野津の生年は不明だが、「享保三戊戌年十月七日為御扨従 被召出二十石五人扶持被下之定江戸（虫損）」<sup>50)</sup>とあり、享保3（1718）年10月7日から「御扨従」という立場で定府している。御扨従とは、『格式』によれば松江藩主の側用人である<sup>51)</sup>。また、享保18（1733）年6月11日に「御廣間方勤仕被仰付」となり、同年8月28日には「定江戸御扨従番組筆頭役」に昇進している<sup>52)</sup>。この御扨従番組には「劔槍柔術の嗜みあるもの」<sup>53)</sup>が多かったという。さらに、延享3（1746）年4月6日には「御留守居本役被仰付、御役科八十表被成下御使番格被

仰付」<sup>54)</sup>となっている。『格式』によれば使番に任命される者は「御扈從番組の筆頭、これは元御広間方と申して、本知百三十石以上の者江戸御邸の御広間番をなし、他の御使者の御取次、またこの方様より定めたる諸家様への御使者をも江戸において勤むる（中略）この筆頭十幾年、江戸詰幾回とかの定め、その功をもって使番役に仰せつけらる定例にてありし」<sup>55)</sup>とされている。使番は普段、藩主の「吉凶伺」ほどの役割しか担わないが、藩主が参勤から帰国する際には速やかに帰城できるよう努め、藩主の帰城を見送った後は直ちに江戸へ戻ったのだという<sup>56)</sup>。そして、野津は宝暦3（1754）年に死去するまで江戸の御留守居を勤めた<sup>57)</sup>。

野津は松江藩の定府の士だったのである。『畧系譜』の内容を踏まえると野津は「柔道の本家」に近い人物とみられるため、道統に連なる実力は無かったものの直信流の門人だったのではないかと考えられる。

時期的にみて、滝野は最初の江戸下向の時期に野津と出会ったものとみられる。滝野は延享元（1744）年から同2（1745）年の間に野津と出会い、その際に野津から「柔道」という名辞を伝えられたものと考えられる。

### 3. 直信流における起倒流の系譜認識

では『畧系譜』以降、直信流ではどのように起倒流との関係をみていたのか。最後にこの点を確認して結論に移りたい。なぜ、この確認が必要なのか。それは満英は直信流の流祖であり、起倒流の流祖ではないと主張したのは老松であるが、以来、茨木流祖説の支持者はこの老松の説を踏襲してきたからである。老松はこの主張のために『註解』のほかに直信流の系図『柔道業術大系図』（以下、『大系図』と略）を主な資料とした。『大系図』は鈴鹿家文書にあり、起倒流と直信流、双方の系図が記されているのが特徴である。老松が鈴鹿家文書の写本を使用したかどうかは不明だが、老松の引用箇所と鈴鹿家文書の『大系図』にある当該箇所の文言は一致するので、本研究で使用しても差し支えないと判断した。

『大系図』の執筆年代は不明である。老松も『大系図』の執筆年代は特定していない。ただし、『大系図』には松江藩の柔道指導の役掌である「柔師役」を担った正順の没年までの事績を書いているので執筆年代の特定にはこれが手がかりになる。正順の経歴は直信流伝書のみならず、寛永15（1638）年から明治2（1869）年頃までの松江藩士の事績をまとめた『烈士録』にもある。『烈士録』と『大系図』とをまとめてみると、『烈士録』では正順の没年は安永9（1780）年とあり、『大系図』には没年は示されていないが、享年87歳とあるため、生年は元禄6（1693）年であると考えられる<sup>58)</sup>。『大系図』は正順の次男九郎衛門の事績がまとめられているところで終わるが、『烈士録』には九郎衛門の没年が寛政10（1798）年のこととされている<sup>59)</sup>。つまり、『大系図』は安永9（1780）年から寛政10（1798）年の間に作成されたと考えられる。久保山によれば、直信流は明和4（1767）年から文化3（1806）年まで続く七代藩主治郷の代に松江藩の家臣に広く浸透したので<sup>60)</sup>、その間に直信流の由緒を示すために『大系図』は作成されたものと考えられる。

さて、『烈士録』によると、正順は寛延3（1750）年2月から同4（1751）年2月まで「江戸勤番」<sup>61)</sup>を務めている。正順は江戸に滞在したこの時期に野津から『畧系譜』を入手したものと考えられる。『大系図』は起倒流の道統を茨木から始めて正浄・滝野の代までしか載せていないが、それは『畧系譜』を参照したためと考えることができる。滝野は宝暦12（1762）年に死去しており、『大系図』が作成されたとみられる時代には養子の滝野小主水貞固や鈴木邦

教の代になっているが、彼らの名はみられない。また、『畧系譜』以外に直信流関係者が起倒流関係者と接触したことを示す資料としては、『畧系譜』と同じく大阪井上家に所蔵される鈴鹿家文書の『登假集』があるが、これは成立時期が『畧系譜』よりも前であり、滝野以降の代についてはやはり記されていない。

さて、『大系図』は満英の事績を「不動体不動智之秘傳仙人ヨリ受得シテ直信柔ト号、是日本江名高キ中興ノ達人也」<sup>62)</sup>と説明し、直信流を号した人物としている。つまり、直心流から直信流へと改称された後、流祖には頼重ではなく、不動体・不動智の教えをうち立てた満英を位置づけたのである<sup>63)</sup>。

こうなると、直信流にとって起倒流の系譜はいささか不都合なものとなる。なぜなら、『畧系譜』では満英が起倒流の流祖とされているためである。西山松之助によれば、「幕藩体制下における各藩は、他藩に対して甚だ対立的な封鎖社会を構成し、特にその武力については、完全な藩独立国内部の秘密事とされていた」<sup>64)</sup>といい、そうした武術諸流の性格を反映するものとしてその藩だけにある他藩にみられない一流一藩武術を挙げている。榎本鐘司によれば一流一藩武術は寛文年間頃から各藩での形成がみられるという<sup>65)</sup>。満英の異母弟の定次が元禄2(1689)年に松江藩の「柔術師役」<sup>66)</sup>に就いたことが『断絶帳』に記されているので、直信流(直心流)はこの頃から一流一藩武術化していったと考えられる。また、今村嘉雄は一流一藩武術の1つに直信流を挙げる一方で、藩を超えて最も広がった柔術流派の1つに起倒流を挙げている<sup>67)</sup>。つまり、松江藩の一流一藩武術である直信流の教えが起倒流にも伝わっているとなれば、それは松江藩の「武力」の機密漏洩が疑われるところとなり、藩内での直信流への信頼や威信が地に落ちることにも繋がったはずである<sup>注2)</sup>。

それゆえ、『大系図』では直信流と起倒流は無関係であることが強調されたのだと考えられる。まず、茨木のことを「福野氏ト語り後チ乱起倒流ト云是起倒流鎧組計ノ元祖也」<sup>68)</sup>と起倒流乱から起倒流へはその間に満英や直心流を挟まず連続しているかのように説明している。また『畧系譜』と異なり『大系図』では、吉村は満英ではなく茨木の弟子として位置づけられ、「作州森美作守公奉仕、茨木氏傳來、美作守公江扶壽出仕ノ節、寺田定次エ満英末流ト申立度吉頼ニ書状ヲ以テ相頼ム、身上ノタメ雖免之不能面談、一度ヒ雲州江來リ及対面度念願ノ處翌年卒ス」<sup>69)</sup>とされている。つまり、茨木の弟子である吉村は松江藩の近隣の美作国津山藩に出仕する際に自身の身元を保証するため、定次に満英の末流であると申し立てることを認めて欲しいと頼んだので、定次は、立身のためならば、とこれを認めたということになっている。しかし、吉村は満英とともに頼重を『地巻』の道統に位置づけており、「満英末流」とだけ認識していたとは考えられない。また、吉村が將軍家の流儀である江戸柳生の門人茨木から起倒流を学んでいるのならば、満英に頼らなくとも身元は保証されたのではないだろうか。このように、『大系図』は満英より後の直信流の系譜を確認するには有力な資料になり得るが、起倒流の系譜や満英の位置づけを検討するには適切な資料とは言えないのである。

#### IV. おわりに

本研究では、最初に起倒流乱、起倒流、直信流(直心流)がどのような関係にあるのかを検討した。正浄・滝野以前には起倒流では福野及び直心流の寺田家とのつながりを意識していた。正浄・滝野も福野及び寺田家を起倒流の道統として位置づけているが、起倒流乱に関心を示すのは正浄・滝野の代であることが確認された。これ以後、起倒流でも茨木の名が系図に載るようになる。

次に『畧系譜』で名辞「柔道」がみられるようになった経緯として、松江藩の定府の士である野津と起倒流の継承者滝野の交流を指摘した。滝野は野津から直信流が柔道を名乗っていることを学んだものと考えられる。一方、滝野は起倒流に伝わる『性鏡』こそ「柔道の大本」であると野津に伝えたのだが、ここから起倒流における「柔道」の意味を探るには『性鏡』の考察が必要であることが判明した。この課題について論じる紙幅はない。今後の課題としたい。

## 本文注

注1) 吉村の『地巻』には「天の巻にいふところの不動智なり」<sup>70)</sup>という一文がある。吉村が著した『天巻』は見つかっていないため、その文面は把握できない。堀田が正浄に発給した『天巻』には「當流ニ本躰ト云事ヲ始ニシメス（中略）敵トミテシカモ心不動虚靈ニシテヤスク對スル所本體ソナハレルナリ、是ヲ不動智トイフ」<sup>71)</sup>とある。水野が言うように『本體』の原本は堀田作である可能性は否定できない。少なくとも日本各地に流布している『本體』の古態は堀田作と考えられるためである。つまり、『本體』の原作者が堀田であったとすれば、本体と不動智を関連づけたのも堀田の可能性がある。堀田以前の『天巻』は今知られているものと別内容だったかもしれない。

一方で、宝暦2(1752)年に安井定自から藤山為勝権丈へと発給された『本體』がある(図5)。この『本體』の道統は吉村から始まり、大森信景、安井自脩、小倉友興と続くが、そこに堀田、正浄、そして滝野の名はみられない(図6)。さらにこの『本體』は、堀田の系統で流布する「本



図5 『本體』(畠山洋平氏蔵)。



図6 堀田を経由していない『本體』であることが分かる(畠山洋平氏蔵)。



図7 出だしが「本体者大本也」となっており、堀田とは別系統の『本體』の文面であることが分かる（畠山洋平氏蔵）。

体者体之事理也<sup>72)</sup> という出だしと異なり、「本体者大本也」<sup>73)</sup> の一文から始まる点も興味深い（図7）。つまり、堀田を経由しない系譜があったということになるので、堀田は『本體』の原作者ではないかもしれないのである。またそうなると、吉村が授けた三巻の1つは『人巻』ではなく『本體』である可能性もでてくるのである。

いずれにせよ、現在の資料発掘状況からは『本體』が吉村より前に作成されたとはやはり考えづらいのである。

注2) 『大系図』で不動智を「仙人」が伝えたとしているのも、全国に広がる新陰流との関係を悟らせないための作為であろうか。

## 謝辞

本研究において使用した東京大学史料編纂所蔵の『起倒流乱目録』、天理大学所蔵の『登假集』、及び安井定自の『本體』は講道館職員 of 畠山洋平氏よりご提供いただきました。また、真田宝物館の『地巻』は同じく講道館職員 of 桐生習作氏よりご提供いただきました。さらに、崩し字解読にあたっては一部、茨城大学教育学部の千葉真由美教授にご教示いただきました。ここに記して感謝を表します。

本研究はJSPS科研費JP17K13133の助成を受けたものです。

## 引用参考文献

- 1) 藤堂良明「柔術から柔道への名辞の変遷について」『武道文化の研究』, 第一書房, 1995年, pp.174-175.
- 2) 井上俊『武道の誕生』, 吉川弘文館, 2004年, p.14.
- 3) 藤堂良明・村田直樹「直信流柔道について—流名・術理及びその思想—」, 『武道学研究』, 第22巻第3号, 日本武道学会, 1990年, pp.10-11.
- 4) 菊本智之「松平定信の武芸思想に関する一考察—新甲乙流への道程—」『武道学研究』第22巻第3号, 日本武道学会, 1990年. また藤堂・小保らは鈴木邦教が柔道を呼称する年代を寛保元(1941)年と特定しているが、これも史資料に基づいて実証されていない(藤堂良明, 小保幸嗣「起倒流柔道について—流名・術理及びその思想—」, 『筑波大学体育科学系紀要』, 第17号, 筑波大学, 1994年, pp.124-125.)。
- 5) 原文二・魚住孝至「起倒流における「柔道」の意味」『国際武道大学紀要』, 第18号, 国際武

- 道大学, 2002年.
- 6) 拙稿「直心流柔術の系譜検証:『直心流柔序』の読解を通して」『武道学研究』, 第43巻第1号, 日本武道学会, 2010年、「直心流柔術における『不動智神妙録』思想の受容過程」『スポーツ科学研究』, 第9号, 早稲田大学スポーツ科学学術院, 2012年、久保山治彦「松江藩における直心流柔道の職制と役割に関する史的研究:藩主給帳調査から」『武道学研究』, 第49巻第2号, 日本武道学会, 2016年.
  - 7) 柳生十兵衛「月の抄」, 1642年(今村嘉雄編『日本武道大系第六巻』, 同朋舎, 1982年, pp.218-219.)
  - 8) 老松信一「起倒流柔術について」『順天堂大学体育学部紀要』, 第6号, 順天堂大学, 1963年、菊本智之「松平定信の武芸思想に関する一考察—新甲乙流への道程—」『武道学研究』第23巻第3号, 日本武道学会, 1991年、桐生習作「起倒流柔術の技法に関する一考察:真田家文書を中心に」『講道館柔道科学研究会紀要』, 第十五輯, 講道館, 2015年.
  - 9) 拙稿「直心流柔術の系譜検証:『直心流柔序』の読解を通して」『武道学研究』, 第43巻第1号, 日本武道学会, 2010年.
  - 10) 真田宝物館の起倒流関係資料の解説については、桐生習作「起倒流柔術の技法に関する一考察:真田家文書を中心に」『講道館柔道科学研究会紀要』, 第十五輯, 講道館, 2015年.を参照されたい.
  - 11) 佐々木哲『系譜伝承論—佐々木六角氏系図の研究—』, 思文閣出版, 2007年, p.23.
  - 12) 渡辺一郎編『武道の名著』, 東京コピィ出版, 1979年, p.194.
  - 13) 老松信一「起倒流柔術について」『順天堂大学体育学部紀要』, 第6号, 順天堂大学, 1963年.
  - 14) 林爾愷『起倒流秘書註解自序』, 東北大学狩野文庫所蔵, 1792年.
  - 15) 前掲書14, pp.1-2.
  - 16) 茨木専斎『起倒流得心之目録』, 筑波大学図書館所蔵, 1639年.
  - 17) 茨木専斎『起倒流乱目録序・起倒流乱授業目録』, 佐賀県立図書館所蔵, 1642年. 同伝書は『起倒流乱目録序』と『起倒流乱授業目録』が合冊にされているがそれぞれのパートに分かれている。『起倒流乱目録序』の末尾には茨木の署名と「寛永壬午一之日」と記されている。『起倒流乱授業目録』は、寛永19(1642)年11月に茨木より大塚勝右衛門に発給されたのち、大塚の門人に代々継承され、寛保元(1741)年に相良求馬から鍋島隼人へ発給されているところまで確認できる(田中洋平「起倒流の史的研一起倒流乱伝書(佐賀県立図書館蔵)について」『筑波大学体育科学系紀要』, 第33号, 2010年, p.215.)
  - 18) 古賀太吉〔筆写〕『天地之部』, 鈴鹿家文書, 1917年.
  - 19) 同前.
  - 20) 渡辺一郎「武道の傳書 行用集」『月刊武道』, 2月号, 日本武道館, 1978年, p.104.
  - 21) 茨木専斎〔渡辺一郎校訂〕「行用集」, 1655年.(前掲書20, p.108.)
  - 22) 執筆者不明『起倒流系図』, 東京国立博物館, 1848年, p.73.なお、ページ数はマイクロフィルム番号に拠った。
  - 23) 前掲書22, p.53.
  - 24) 寺田勘右衛門満英『直心流柔序』, 鈴鹿家文書, 1664年.
  - 25) 前掲書9.
  - 26) 井上九郎右衛門重永『直心流柔術序』, 鈴鹿家文書, 1721年.

- 27) 堀江『中央書』, 鈴鹿家文書, 1729年.
- 28) 前掲書3, pp.12-13.
- 29) 定安が福野に技を伝承したとする説は小松原濤『陳元賛の研究』, 雄山閣, 1962年, p.98.でも述べられている。
- 30) 久保山治彦「松江藩における直信流柔道の職制と役割に関する史的研究:藩主給帳調査から」『武道学研究』, 第49巻第2号, 日本武道学会, 2016年, pp.84-85.
- 31) 茨木三安昌軒『起倒流乱目録』, 東京大学史料編纂所蔵, 1649年.
- 32) 飯田忠彦『系図纂要三十一下』, 国立公文書館所蔵, 執筆年不明.
- 33) 田中暁籠『近世前期朝幕関係の研究』, 吉川弘文館, 2011年, p.81.
- 34) 拙稿「直心流柔術における『不動智神妙録』思想の受容過程」『スポーツ科学研究』, 第9号, 早稲田大学スポーツ科学学術院, 2012年, p.209.
- 35) 谷口眞子『赤穂浪士の実像』, 吉川弘文館, 2006年, pp.110-133.
- 36) 吉村兵助扶寿『地巻』, 真田宝物館所蔵, 1685年.
- 37) 前掲書9, p.15.
- 38) 寺田勘右衛門満英『直心流柔序』, 鈴鹿家文書, 1670年.
- 39) 水野忠通『柔道雨中間答』, 1806年. (前掲書12, p.203.)
- 40) 渡辺一郎「武道の傳書 燈下問答」『月刊武道』6月号, 日本武道館, 1979年, p.66.
- 41) 寺田市右衛門正浄『富嶋氏意起倒流組討心持聞書』, 真田宝物館所蔵, 執筆年不明.
- 42) 寺田市右衛門正浄『登假集』, 1729年 (前掲書12, p.176.)
- 43) 前掲書42, p.173.
- 44) 寺田市右衛門正浄『登假集』, 鈴鹿家文書, 執筆年不明、同〔入江宇定写〕『登假集』, 天理大学図書館所蔵, 1791年.
- 45) 滝野遊軒『起倒柔道鎧組打畧系譜』, 鈴鹿家文書, 1745年.
- 46) 同前.
- 47) 同前.
- 48) 入江康平ほか『鈴鹿家文書解説(四) 一付・鈴鹿家文書総目録一』, 全日本剣道連盟, 2006年, p.180
- 49) 前掲書12, pp.188-189
- 50) 執筆者不明『松江藩烈士録断絶帳解説 其之四』, 鳥根県立図書館所蔵, 執筆年不明, p.16.
- 51) 中原健次『松江藩格式と職制』, 松江今井書店, 1997年, pp.44-45
- 52) 前掲書50, p.16.
- 53) 前掲書51, p.33.
- 54) 前掲書50, p.16
- 55) 前掲書51, p.19.
- 56) 同前.
- 57) 前掲書50, p.16.
- 58) 執筆者不明『柔道業術大系図』, 鈴鹿家文書, 執筆年不明、鳥根県立図書館郷土資料編『松江藩烈士録 第1巻』, 鳥根県立図書館, 2004年, p.228.
- 59) 鳥根県立図書館郷土資料編『松江藩烈士録 第1巻』, 鳥根県立図書館, 2004年, p.228.
- 60) 前掲書30, pp.91-92.

- 61) 前掲書59.
- 62) 執筆者不明『柔道業術大系図』, 鈴鹿家文書, 執筆年不明.
- 63) 満英の不動体・不動智の詳細については、前掲書34を参照のこと。
- 64) 西山松之助『家元の研究』, 吉川弘文館, 1982年, p.273.
- 65) 榎本鐘司「一流一藩武術流派形成に関する一考察——養勇流伝書形成にみられる儒学の影響」  
『アカデミア南山大学紀要自然科学・保健体育編』第2巻, 南山大学, 1984年.
- 66) 執筆者不明『松江藩列士録断絶帳解説 其之三』, 鳥根県立図書館所蔵, 執筆年不明, p.40.
- 67) 今村嘉雄『修訂十九世紀に於ける日本体育の研究』, 第一書房, 1989年, pp.374-375.
- 68) 前掲書62.
- 69) 同前.
- 70) 前掲書36.
- 71) 堀田佐五右衛門『天巻』, 真田宝物館所蔵, 1715年.
- 72) 瀧野太仲源源信『本體』, 1745年. (老松信一・植芝吉祥丸編『日本武道大系第六巻』, 同朋舎, 1982年, p.372.)
- 73) 安井定自『本體』, 畠山洋平氏私蔵, 1752年.